
男の戦い

フォルティッシモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の戦い

【Nコード】

N1071N

【作者名】

フォルティッシモ

【あらすじ】

霧島さんとののかな放課後を楽しんでいると悪友、正哉が突如襲い掛かってきた。はたしてその理由とは？

「うおらあっつ！」

一閃。身をかがめた瞬間頭上を鋭い風圧が襲う。これは冗談抜きにヤバイ。こいつは本気だ。

「正哉君、お願いやめて！！ 私、恥ずかしくて言えなかったけど、本当は亮く……」

「黙っててくれ。これは、俺と亮の問題だ。」

問題があるのはお前の頭だろう。俺がいったい何をした。意味が分からない。さっきまで俺は霧島さんとクッキー片手に楽しいひと時を過ごしていたというのに。あーん、をしようとしたときは流石に断ったけど。妙に最近霧島さんが俺に親切なのが気になる。ああ、そんなこと今はどうでもいい。

隣の霧島さんはおろおろと挙動不審気味に俺たちを見ている。そんなきよるきよるする暇があったら俺に状況を説明してくれよ。

「お前は俺の初恋を踏みにした。俺と佳奈のささやかな交流を、お前は踏みにしたんだ。俺は絶対に許さねえ」

霧島さんの挙動不審は警官に職務質問されそうなレベルに達した。顔がりんごみたいに赤い。よく見たら半泣きだ。

俺の混乱も頂点に達している。そもそもこいつの言うことがまったく理解できない。確かに俺は彼女と多少なり付き合いはあるが、今日もいつも通り喋ってただけだ。それがお前に何の関係があるってんだ。

「ちょっと待っててくれよ。言いがかりだ。っていつかお前さっきから何を言って……」

「言い訳は聞きたくねえ。反論があるなら俺に勝ってからにしろ。……いくぞ」

次の瞬間、もう正哉は間合いに入っていた。異常に速い。横にス Tepp。容赦のない突きが俺の腕をかすめる。まだまだ、横薙ぎがく

る。しゃがめ。少し遅れた。頭に星が散る。その隙を正哉が見逃すはずもない、追撃が耳元でうなる。

だめだ、説得などしている余裕はない。応戦しなければしゃれにならない事態になりそうだ。

正面から打ち込む。小気味よい音とともに火花が散った。つばぜり合いだ。腕が軋み、筋肉が悲鳴を上げる。力は互角だ。このまま気合で追い込めば……

「なっ!？」

突然正哉が力を抜いた。俺の切っ先は空を切る。正哉はいなした勢いを生かして体を捻っている。回し蹴りだ。これは避けられない。先ほどとは比べ物にならない重い衝撃。体が宙に浮かぶ。体が後ろに落ちていく感覚。ここで倒れたら終わりだ。足を曲げて落下に備える。着地。防御した左手が鈍く痛むが関係ない。

右手には慣れ親しんだ感触がある。大丈夫だ。取り落としてはいい。これならまだやれる。

「流石だな」

正哉は笑っていた。俺の口も笑みの形に変わる。思えばいつ以来だろうか。こんな風に本気でこいつとやりあうのは。

もはや原因などどうでもよかった。昔の懐かしい感覚が戻ってきたようだ。周りの風景も、霧島さんも全て意識から消えた。こいつに勝つ。ただそれだけ。

正哉の打ち込み。もはや言葉は要らない。全神経を相手の動きに集中する。一撃でもまとともに食らったら負ける。打ち下ろし、突き、蹴り、なぎ払いと怒涛のように攻めてくる。

攻撃を受けるたびに左腕がうずく。もはやほとんど役には立っていない。正哉もそのくらい見抜いている。このまま守っているはジリ貧だ。

後ろにステップ。休ませまいと正哉も一足飛びで距離をつめてくる。ここだ。

右手を思い切り引き、肩口を狙って突きを繰り出す。正哉の顔に

一瞬緊張が走った。それでも冷静に、無駄のない動きで斜め後ろに弾こうとする。その瞬間、俺は右手を離した。

「っ!？」

無理な体勢からいなそうとしたせいで正哉はバランスを失っている。チャンスだ。この距離なら拳が届く。

正哉もこちらの狙いに気づいた。体勢の立て直しを放棄し力任せに右腕を振るってくる。丸腰の俺が無傷ですむには距離をとるしかない。それならいっそ……

正哉が目を見開いた。左腕から嫌な音が響く。じん、としびれが走った次の瞬間感覚がなくなった。これでいい。どうせ役に立たないのなら同じことだ。

「終わりだな、正哉」

こつなつたら正哉の顔はただの的だ。後は思い切りこの拳を叩き込むだけ……

「駄目えええっつ!!!」

突如、俺の視界に何かが飛び込んできた。何だよ、今いいところだったのに。

「お願い……っく 私が……悪かったの…… 言わなきゃと思ってたけど……怖くて……ひっく」

我に返ると霧島さんが泣いているのが見えた。ああ、まだいたんだ。言わなきゃって何の話をしてるんだ？

正哉のほづを見るとなんだかショックを受けたような顔をしている。え？ こいつに通じて俺には通じてないの？

「まさか…… 違う…… 悪いのは亮だ。そうだよな？ そうだと言ってくれ……」

正哉も泣きそうだ。正直気持ち悪い。こつちみんな。

「違うの…… ほんと私は私……私……」

正哉の顔がさらに歪んだ。直視できない。霧島さんが一大決心をしたように泣きぬれた顔を上げた。

「私があげちゃったの！！ 佳奈ちゃんのクッキー…… 正哉君へのプレゼントだなんて…… 知らなくて……」

空気が死んだ。力を失った正哉の手から落ちた箸がかこんと間抜けな音を立てて床に転がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1071n/>

男の戦い

2010年10月8日14時43分発行